探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：府中市立府中学園

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
府中市立府中学園	34	786

（R5.12.1現在で記入）

１　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

研究テーマは、「学び続ける児童生徒の育成～児童生徒主体の探究的な学習づくりを通して～」としている。令和３年度当初、本校は、教師が単元計画にとらわれすぎるあまり学習が活動主義的になったり、課題との出会わせ方の工夫が不十分であったりしたため、課題設定が児童生徒主体になっていないという現状がみられた。このことが、真の探究的な学習になっていないという課題につながっていると考えた結果、令和４年度は「PBL（プロジェクト型学習）の考え方を参考にした、総合的な学習の時間の単元開発・改善・実践」と「総合的な学習の時間「全体計画」の見直し」の２つを研究の柱として取り組んだ。

今年度は、この２つの研究の成果を学校内・外に普及していくことをねらいとし、以下の３つに重点的に取り組んだ。

１　問題に自分事として向き合うための「課題設定」の工夫
２　ファシリテートをいかに実践するか
３　府中市教育研究会の部会を通じた各校への研究成果の普及

（２）資質・能力の設定について

令和４年度の「総合的な学習の時間全体計画」の見直しにより、本校では育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つに整理した。また、国立教育政策研究所の「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」を参考に、評価規準をつくるうえでそれぞれ３つの資質・能力を構成する要素を「知識」「技能」「探究的な学習のよさの理解」「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」「自己理解・他者理解」「主体性・協働性」「将来展望・社会参画」の10に整理している。

（３）取組について

①　問題に自分事として向き合うための「課題設定」の工夫

令和４年度に実践を行い成果が出た「理想」と「現実」のズレから課題を見つける手法を用い、課題を発見するための「仕掛け」の工夫を行った。

②　ファシリテートをいかに実践するか

「教師先導」という課題を克服し、「わくわくする探究」を目指して教員の意識改革を行った。

③　府中市教育研究会の部会を通じた研究成果の普及

府中市教育研究会総合的な学習の時間部会を通じ、令和４年度までの本校の取組を紹介した。中でも、「理想」と「現実」のズレから課題を見つける手法と、教員のファシリテートをいかに実践するかについては、研究授業を市内公開にするなどして多くの学校に普及を行った。

２　実践事例

１　問題に自分事として向き合うための「課題設定」の工夫

令和４年度に実践を行い成果が出た「理想」と「現実」のズレから課題を見つける手法は、今年度全学年に普及するため、年度初めに教育研究部通信を通じて教員へ周知を行った。疑問や驚きの中から課題を見出し、自分事として課題を解決していくことの必要性を発信した（図1）。

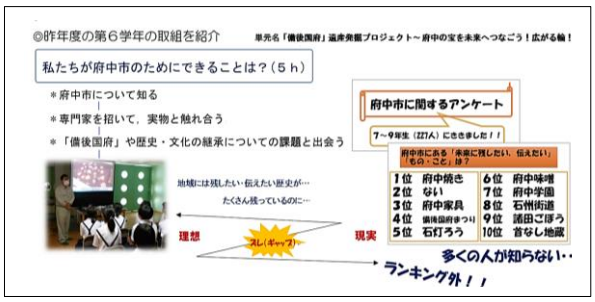

図1　「理想」と「現実」のズレから課題を見出した例
（府中学園「教育研究部通信2号」より）

今年度の「理想」と「現実」のズレから課題を見つける手法の実践事例として、７学年の課題との出会わせ方や課題を発見するための「仕掛け」の工夫を取り上げる。

７学年は令和４年度の全体計画見直しによって、「SDGs」を新たなカテゴリとした。新たな単元開発の意図としては、貧困、紛争、感染症、気候変動、資源の枯渇といった人類共通の問題であるSDGsについて調べることを通して、SDGsが自分たちの身近な生活と結びついていることに気付き、持続可能な社会の創造のために自分たちにできることを見つけ実践することができるようにするとともに、2030年の未来で社会に貢献できる自分を目指すことを目標とした。

課題の設定では、学習の必然性や自分事として意識できる場面を設定するために、疑問や驚きなどから問題を見いだし、これまでの考えとのずれや隔たり、対象への可能性を感じさせることで学習の目的意識を持たせた。そこで用いたのが、アンケートによる「理想」と「現実」のズレである（図2）。

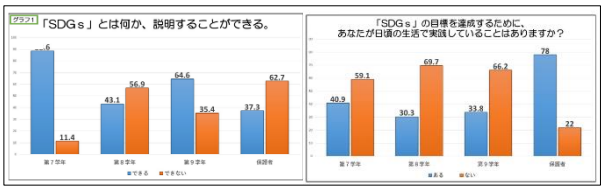

図2　7年・8年・9年と7年保護者を対象としたアンケート

このアンケートによって明らかになったのは、「７年生はSDGsのことを知っているが、日頃の生活で実践していない。しかし保護者は、「SDGsのことをよく知らないが日頃の生活で実践している」という結果であった。SDGsのことをあまり知らない保護者の方が、学習に取り組んだ自分達より行動しているという事実を知り、自分たちの認識と現実とのズレを認識し、新たな学習課題を設定することにつながった。７年生がこのズレから設定した課題が「2030年の未来で社会に貢献できる自分を目指すために、今から自分たちが実践して取り組んでいける持続可能なSDGsにはどんなことがあるのか」である。単元の最後には再度同じアンケートを実施することで、自分たちの課題が達成できたかどうかの「検証」を行う。「なぜ課題の解決に取り組まなければいけないのか」を意識させる課題の設定は、これまでの生活や学習と、これからの社会の動きとの両面を相互に結び付け、よりよい社会の創造について考えたり課題を解決したりしていくために、SDGsについての単なる知識の積み上げではなく、「検証」を前提とする実践を意識した課題発見・解決型の探究を行うことを可能とした。

また、８年生の課題設定場面では、「理想」と「現実」のズレ(ギャップ)から双方が結び付いた解決案を見出すことができるよう、視点を示したりYチャートやベン図などの思考ツールを選択させ活用させ、個に応じた指導の充実が図られるよう工夫を行っている。

２　ファシリテートをいかに実践するか

５月の教員アンケートでの結果から、本校はファシリテートの重要性は認識できているものの、実際にはファシリテートできていない教員が多いという課題があることが明らかとなった。(表1)

そこで、ファシリテートを意識して行っている教員の授業を参考に、教育研究部通信を通じて教員へ周知を行っていった。また、研究協議会で助言をいただいた内容をもとに、他校の実践紹介を取り入れるなどして、ファシリテートの手立てや意識改革のポイントを普及した(図３)。

授業では、教師は先導するのではなく、授業をファシリテートすることが大事だと思う。

とてもそう思う	そう思う	あまりそう思わない	そう思わない
46.7	53.3	0	0

授業では、先導するのではなくファシリテートすることができている。

とてもできている	できている	あまりできていない	まったくできていない	授業を担当していない
0	22.6	35.5	6.4	35.5

表１　教員を対象にした、「ファシリテート」に関する意識調査　(%)

《 ファシリテートのために考えられる手立て 》

●三原市の小学校で子供が主体となるために取り入れられている視点

・児童の言葉をじっくり待つ　・自分自身の気配を消す　・子供の決定を尊重する

・活動のねらいから逸れた時のみ声かけをする　・教師の発言は5分程度（＝発言や発問の精選）

※この5つの条件が、ファシリテートになるという意味ではありません。(あくまで参考に)

●どういう考えが出るのかを予測！ 学習のゴールで目指すべき姿をはっきりと持っておく

・どんな考えを持って　・具体的に何を感じて　・何を考え　・どんな言葉を発しているか

図3　ファシリテートのために考えられる手立て

(府中学園「教育研究部通信9号」より)

３　府中市教育研究会の部会を通じた研究成果の普及

「理想」と「現実」のズレから課題を見つける手法と、ファシリテートをいかに実践するかについては、校内だけではなく市内各校にも研究成果を普及していくことができた。

本校で10月４日(水)に行った探究的な学習の在り方に関する第３回研究推進協議会は、府中市教育研究会総合的な学習の時間部会と兼ねて開催した。８年生「探究型キャリア体験学習」の研究授業では、３日間の体験で得た情報から、事業所の「理想」と「現実」のズレを認識し、事業所ごとの課題を設定する授業を提案した。また、研究報告では「児童生徒がつくり出す授業づくり」と題し、ファシリテートの方法や自身の意識変容について本校教諭が実践報告を行った。

写真　10月4日(水)の研究授業と研究報告の様子

府中市教育研究会総合的な学習の時間部会では、令和４年度本校が取り組んだ「全体計画の見直し」についても普及をした。本市では、令和６年度に広島県小学校生活科・総合的な学習の時間研究大会が行われる。これに向けて、市内４学園（図４）の小中がより一貫した教育を行うために、９年間の発達段階に応じた系統性のある評価へと見直す取組を行った。本校は全体計画の見直しに係るモデル校となり、資質能力の再整理の視点・観点の構成要素の追加などで助言を行った。

写真 総合的な学習の時間部会での見直し作業の様子

図４　市内４学園

３　研究の成果と課題等

（１）成果

課題との出会わせ方の工夫について、本校７年生(100名)を対象に、課題設定場面の意識調査を行った。意識調査における回答結果は以下の通りである。

7年生・8年生・9年生・7年生保護者を対象として行ったSDGsアンケートで、7年生の「SDGsとは何か、説明することができる」の結果は「できる」が多かったにもかかわらず、「SDGsの目標を達成するために、あなたが日常の生活で実践していることはありますか」の結果で7年生は「ない」が多くありました。その一方で、SDGsをあまり知らない保護者の「実践していることが「ある」」の回答が多いとわかったとき、自分が最も感じたことを、次の選択肢から１つ選んでください。

内容	肯定的評価
自分たちの認識と世の中のズレを認識した。(考えていた予想とは違った。)	36.6%　※
なぜだろう、理由を探りたいと思った。	20.3%　※
予想どおりの結果だった。	16.5%
自分たちが課題設定をするためのきっかけになった。	16.5%
自分自身で課題を解決していかなければいけないと感じた。	10.1%

表２　第７学年を対象とした意識調査

意識調査の結果(表２)から、半数以上の生徒に動機付けや課題意識をもたせることができた（※の合計56.9%)。特に、36.6%の生徒が自分の認識と現実にズレがあることを発見し、自分事として向き合い課題設定をする大きなきっかけを作ることができた。

次に、本事業の今年度の目標「成果の普及」に関して、本校の研究の成果を学校内・外にどれくらい普及できたか調査を行った。２月に行った教職員対象のアンケートによる意識調査の回答結果は以下の通りである※(　)は５月。

問1　今年度の生活科・総合的な学習の時間で、児童生徒主体の課題設定ができている。

とてもそう思う	そう思う	あまりそう思わない	そう思わない	授業を担当していない
31.6　(0)	42.1　(52.9)	5.3 (14.7)	5.2　(3.0)	15.8　(29.4)

問2　課題設定場面では、児童生徒に問題を自分事に感じさせて課題を捉えさせるために、どのような工夫を行っていますか。

「理想」と「現実」のズレを感じさせる	予想と異なる結果からショックを与える	「驚かしてほしい」等の地域の方の声から	その他
55.6　(64.3)	27.8　(28.6)	16.6　(0)	0　(7.1)

問3　授業では、教師は先導するのではなく、授業をファシリテートすることが大事だと思う。

とてもそう思う	そう思う	あまりそう思わない	そう思わない
52.6　(46.7)	47.4　(53.3)	0　(0)	0　(0)

問4　授業では、先導するのではなくファシリテートすることができている。

とてもできている	できている	あまりできていない	まったくできていない	授業を担当していない
5.3　(0)	36.8　(22.6)	31.6　(35.5)	0　(6.4)	26.3　(35.5)

表３　教員を対象にした意識調査　(%)

表３の問１の結果から、５月に比べ２月は「児童生徒主体の課題設定ができている」と答えた教員の割合が増加した(肯定的回答５月52.9%、２月73.7%)。「理想」と「現実」のズレや驚き・疑問などから課題を見つける「課題設定の工夫」が各学年に普及し、児童生徒が問題に自分事として向き合うことができるような指導の工夫が行われるようになった結果だと考える(問２)。また、ファシリテートについては、大事だと「とてもそう思う」の割合が増えた(問３の結果)だけでなく、実際にファシリテートすることができていると肯定的回答をした教員の割合も大きく増加した(肯定的回答５月22.6%、２月42.1%)。

（２）課題

表３の問４のファシリテートについて「あまりできていない」という回答が31.6%あった。ファシリテートの重要性についてだけでなく、ファシリテートの手立てや授業での意識改革を全ての教員で理解し、行っていく必要がある。

（３）今後の改善方策等

課題設定の工夫やファシリテートの重要性について、年度初めに共通認識が図られるような校内研修体制をつくることが望ましいと考える。また、府中市教育研究会を通じ実践発表や実践交流を行うことで、本校だけでなく市内各校の取組も参考にしながら探究的な学びを深めていくことが可能であると考える。